

R.8、8、5（水）

あ あ、夏休み！

暦の上では、今週をもって夏が終わりとなります。夏休みも12日間が終わりになります。子どもたちがおらず（児童クラブからは元気な声が聴こえてきますが…。クラブの先生方、ありがとうございます。）静かな学校です。寂しさも感じます。

今日は、ほっとひと息、夏休みの思い出を書かせていただきます。

★宮島 哲也 物語 【少年編】

哲也の夏休みの遊びと言えば、近所に住む1つ年上の男子2人と一緒に3人で野球をやること。哲也の通っていた昭和小学校では、午前中は10時まで遊びに行ってもいけないことになっていたの、仕方なく10時までは一応宿題をやり、10時になると3人で、近所の田んぼの中にある“球場”へ出掛けた。バットとグローブとボールを持って、自転車に乗って行ったのだった。“球場”と言っても、そこは、田んぼをつぶしてフェンスで囲っただけの、なんの遊具もないただの広場だった。しかしそこは、子どもの哲也たちにとって、広すぎずせますぎず、ちょうどいい広さの、正に“球場”だったのだ。球場に着くとジャンケンで打順を決めて、ホームラン競争をした。つまり、ピッチャー・バッター・守備、それを3人でローテーションするのだった。ホームラン競争だから狙うはホームランなのだが、実際ホームランを打つと、田んぼの中に入ったボールを探すのに一苦勞をしていた。田んぼの中にあまり雑に入っていると、稲を倒してしまうと地主さんに怒られてしまうし、でも稲をかき分けていかないとボールは探せないし……。裸足になってボールを探したり、靴をはき直して野球をやったり、たっぷりとある時間はゆっくりと流れていったのだった。今思えば、よくも3人で野球ができたと思うのだが、お昼をはさんで1日中やっていたことも、しばしばあった。それくらいしか、やることがなかったのかも知れない。

その“球場”も、哲也が中学生になると、スペースの半分にあずま屋やすべり台、水飲み場などが作られ、しっかりとした公園となった。

あれからおよそ50年。今では小学生が野球をやる姿も、あまり見かけなくなってしまった。

ふっと夏空の下青空と入道雲を見上げるうと、少年時代の夏の景色が、田んぼや風のおいが、頭の中によみがえってくる哲也（大人）だった……。